

夜行バスで隣の
清楚系女子大生に

搾られる





夜行バスで隣の
清楚系女子大生に

搾られる





まえがき

『夜行バスで隣の清楚系女子大生に搾られる』をお手にとっていただき、本当にありがとうございます。

表題作は、pixivで多くの反響をいただいた同名の作品をベースに、加筆修正を施して仕上げました。既公開作品ではありますが、美咲をイメージして作成した表紙とともに、一冊の書籍としてのパッケージを楽しんでいただければ幸いです。

夜行バスの初対面の関係とは一転して、書き下ろしの『毛布の影で清楚な従妹に搾られる』では、従兄という身近な人物に狙いを定めます。

深夜バスや親族の集まる法事といった「音を立てれば即、社会的死」が待っている極限状況の中、誰かに見つかるかもしれないという静寂の中、美咲がどのように獲物を封じ、搾り取るのか。

逃げ場のない檻の中、彼女が仕掛ける甘い罠に絡め取られる背徳感をどうぞ心ゆくまで。

目次

まえがき

夜行バスで隣の清楚系女子大生に搾られる

毛布の影で清楚な従妹に搾られる

あとがき

夜行バスで隣の清楚系女子大生に搾られる

一

東京の夜気は、肌を刺すように冷たい。

新宿のバスターミナルは、週末の解放感と、明日へと急かされる焦燥感が入り混じった独特の熱気を孕んでいた。発車時刻を告げる電光掲示板の赤い文字が、無機質に時間を削り取っていく。

佐藤は寒さにかじかんだ指先をコートのポケットに深く突っ込み、白い息を吐き出した。二十七八歳、独身。中堅IT企業の事務職として、誰にでもできる仕事を、誰よりも真面目にこなすだけの毎日。深夜バスでの帰省は、節約のためというよりも、新幹線の華やいだ空気に馴染めない自分への言い訳のようなものだった。

ふと、待合ベンチの足元に目が留まった。誰かが座っていた形跡のあるその場所に、ポツンと何かが取り残されている。近づいてみると、それはパステルブルーの可愛らしい財布だった。安物ではないが、ブランドを主張しすぎない上品な革の質感。拾い上げると、微かに甘いバニラの香りが鼻を掠めた。

（落とし物か……交番に届けるべきか？ いや、まだ近くに持ち主がいるかもしれない）

佐藤は財布を手にも、周囲を見渡した。すると、数メートル先で、一人の若い女性が困り果てた様子で自分のカバンの中をまさぐっているのが見えた。

ベージュのニットに、膝丈のフレアスカート。黒髪は艶やかに整えられ、夜の闇の中でも白く浮き上がるような肌をしている。季節外れの桜のように柔らかな存在感を持つ彼女は、泣き出しそうな顔で辺りをキョロキョロと見回していた。

「あの、すみません」

佐藤は迷わず彼女に声をかけた。彼女はびっくりと肩を震わせ、振り返る。その瞳には不安の色が揺れていたが、佐藤の手にあるものを見た瞬間、花が咲くようにパツと明るくなった。

「あ、それ！」

「これ、落ちてましたよ。あそこのベンチに」

「よ、よかったあ……！　そうです、私のです！」

彼女——美咲は、佐藤の前まで駆け寄ると、安堵のため息をついた。

「ありがとうございます！　もう、私ったら……バスの時間に焦っちゃって、全然気づかなくて」

「あ、いえ。見つかってよかったです。大事なものでしょうから」

佐藤は財布を差し出す。指先が触れ合うことさえ躊躇われるほどの、圧倒的な「清楚」のオーラ。美咲はそれを両手で恭しく受け取ると、深々と頭を下げた。

「本当に助かりました。中身、全部入ってたんで……もし無くしてたらと思うと」

「気をつけてくださいね。この辺、人も多いですし」

佐藤は精一杯の「大人の余裕」を見せて微笑んだつもりだった。美咲は上目遣いで彼を見つめ返し、「はい、優しい方でよかった」と小さく呟く。その言葉が、佐藤の乾いた自尊心にじわりと染み込んだ。

彼女はもう一度頭を下げると、小走りで待合室の方へと消えていく。その後ろ姿を目で追いながら、佐藤は胸の奥が少しだけ温かくなるのを感じていた。

「ただの偶然。よくある些細な親切。けれど、殺伐とした東京の夜に、こんな綺麗な物語が落ちていることもあるのだ。」

（いい子だったな……）

佐藤はその余韻を噛み締めながら、到着したバスの列に並んだ。

彼は知らなかった。その財布が、彼のような誠実な人間が見つけやすい位置に計算されて「配置」されていたことを。そして、「優しい方でよかった」という言葉が、獲物の警戒心を解き、骨の髄までしゃぶり尽くすための「いただきます」の合図であったことを。

車内は、深海の底のように静まり返っていた。四列シートの狭苦しい空間だが、平日の深夜便ということもあり、乗客はまばらだ。佐藤は予約していた窓側の席に荷物を置き、深く息を吐き出した。

幸運なことに、通路側の席はまだ空いている。先日予約したときは「空席」となっていたはずだが、直前予約が入ることも珍しくない。

（このまま隣が来なければ、足を伸ばして寝られるんだが）

眼鏡の位置を直し、文庫本を取り出そうとした時だった。

カツ、カツ、カツ。

通路を歩くヒールの音が、静寂を切り裂くことなく、しかし確実に近づいてくる。その足音は、迷うことなく佐藤の席の横で止まった。

「あ」

頭上から降ってきた声に、佐藤は顔を上げる。心臓が、早鐘を打った。そこに立っていたのは、先ほどの彼女——美咲だった。

「……お兄さん？」

彼女もまた、驚いたように目を瞬かせている。

佐藤は言葉を失った。数千分の一の確率。東京という巨大な蟻地獄の中で、一度すれ違っただけの人間と、同じバスの、しかも隣の席になる確率など、天文学的な数字に違いない。

「まさか、隣の席だったなんて」

「ぐ、偶然ですね……」

佐藤の声は裏返っていた。美咲はふわりと微笑み、「奇跡みたい」と悪戯っぽく笑う。

彼女は持っていたキャリーケースを慣れた手つきで上の棚に上げようとした。重そうによるめく彼女を見て、佐藤は反射的に腰を浮かす。

「あ、やりますよ」

「すみません、ありがとうございます……」

佐藤が彼女の荷物を持ち上げる際、ふわりと鼻先を掠めたのは、財布と同じバニラの香りだった。甘く、どこか懐かしく、そして脳の芯を麻痺させるような香り。

荷物を収め、席に座るまでの数秒間が、佐藤には永遠のように長く感じられた。彼女のコートが擦れる音。ストッキングに包まれた脚が、窮屈そうに身をよじる気配。隣に座った彼女の体温が、数センチの空間を隔てて伝わってくるようだ。

「よろしくお願いしますね。私、寝相悪いかもしれないんで」

「あ、いえ、こちらこそ……」

美咲は小さく会釈をして、マスクを取り出し、その端正な顔半分を覆った。それでも、長い睫毛と理知的な瞳の輝きは隠せない。

佐藤は高鳴る鼓動を悟られないよう、必死に平静を装って窓の外を見た。ガラスに映る自分の顔は、情けないほど緩んでいる。

（ツイてる。今日はなんて日だ）

彼は知る由もない。美咲があえて予約済みの席の隣を確保したことを。そして同じ便の男性客全員にそれとなく接触して、値踏みしていたことを。彼女にとってこれは「奇跡」ではない。「収獲」のための地道な作業の結果でしかなかった。

もちろん、誰が隣になるかは彼女にもわからない。隣がハズレなら、彼女も大人しくしていただろう。そのランダム性すらも、彼女にとっては楽しみの一つなのだ。

そして、佐藤はもちろん……。

バスは定刻通りにターミナルを滑り出した。流れる都会の夜景。隣には、清楚な女子大生。

佐藤は、これから始まる長い夜が、甘美な旅路になることを疑いもしなかった。

消灯のアナウンスが流れたのは、高速道路に入ってから三十分ほど経ってからだった。

「これより車内を消灯いたします。他のお客様のご迷惑となりますので、スマートフォンのご使用はお控えください」

無機質な放送と共に、車内の明かりが一斉に落ちる。世界は一瞬にして闇に包まれた。頼りになるのは、床に埋め込まれた非常灯の薄緑色の光と、分厚いカーテンの隙間から断続的に差し込む、高速道路の街灯のオレンジ色の光だけだ。

視覚が制限された分、他の感覚が鋭敏になる。

隣から聞こえる、美咲の規則正しい寝息。ブランケットの下で、彼女の膝が時折、佐藤の太ももに触れる感触。その度に、佐藤の体は電流が走ったように強張った。

眠れるはずがない。暗闇という密室に、見ず知らずの若い女性と二人きり。しかも、一度言葉を交わしたという「親密さ」の種が、佐藤の妄想を加速させていく。

（何か話すべきか？ いや、寝ているのを起こすのは……）

葛藤しながらも、佐藤は意識を隣席に集中させていた。

その時だった。ガサリ、と衣擦れの音がした。

美咲が身じろぎをしたのかと思った瞬間、ブランケットの下で、何かが佐藤の手の甲に触れた。ひやりとするほど冷たい、細い指先。

「……え？」

佐藤は声を押して殺して隣を見る。暗闇に目が慣れてくると、美咲が起きていて、こちらを見ているのが分かった。マスクは外されており、薄暗がりの中で、その瞳だけが濡れたように光っている。

「……お兄さん、起きてます？」

囁くような、吐息そのもののような声。佐藤の耳元に直接注ぎ込まれるようなその響きに、背筋がぞくりと震えた。

「は、はい……どうしました？」

「眠れなくて……」

美咲は身を乗り出すようにして、佐藤との距離を詰めてきた。二人の顔の距離は、拳一つ分もない。彼女の吐息が、佐藤の頬にかかる。

「さっきは、ありがとうございました。本当に嬉しかったです」

「いや、そんな……当然のことをしただけで」

「その当然のことができない人、多いんですよ。」

美咲の指先が、佐藤の手の甲を這い、手首を掴んだ。華奢な指なのに、そこには逃れられないような不思議な力が込められている。

彼女はそのまま、佐藤の手を自分のブランケットの中へと引き込んだ。

そこは温かく、そして危険なほど柔らかい感触に満ちていた。

「お礼、させてください」

「お礼って……そんな、いいです」

「しーっ……」

美咲は人差し指を佐藤の唇に当てた。

甘い香り。彼女の指には、ほのかにハンドクリームの香りが残っている。

「誰も見てませんから」

その言葉は、免罪符であり、同時に共犯者への勧誘でもあった。

佐藤が何かを言う前に、美咲の姿が沈み込んだ。